

満洲文字の文字表をめぐって(13)

—音価(3)子音：方言調査にみる破裂音と破擦音の音質—

吉池孝一 中村雅之

はじめに

吉池：今回は、服部四郎(1937)「一資料」<sup>1</sup>、池上二郎(1955)「トゥングース語」<sup>2</sup>、河内良弘(1996)『文語文典』<sup>3</sup>に記された四種の音の一覧表と、『満漢字清文啓蒙』(雍正庚戌(1730)程明遠題)により、母音の音価を検討しました。

中村：問題が多いのは満文 o と u でしたね。満文 o と u には、『満漢字清文啓蒙』で同じ漢字の注記が付されます。同音であったのでしょうか。

吉池：『満漢字清文啓蒙』中の満文 o (及び u) に対する付記「在聯字内俱念傲。単用仍念窩。」(聯字内即ち単語内においてはすべて「傲」と発音し、単独で用いる場合はしばしば「窩」と発音する)は、読みにくいものでした。この付記は、語頭の o (及び u) は「窩」[uo] と発音するのではなく「傲」[o] と発音せよとの学習者への注意と読みました。これは、池上二郎(1986-1987)「清文啓蒙」<sup>4</sup>の考察と同様です。

中村：しかし、付記の「窩」と、見出しの「窩」の読み方は、池上二郎(1986-1987)と異なります。我々は、付記の「窩」は [uo] で、見出しの「窩」は [o] である、と理解しました。今回は、子音、特に破裂音と破擦音の音質について検討するということでした。

三つの文献の子音

吉池：満洲文字が表す音の概略を知るため、服部四郎(1937)「一資料」、池上二郎(1955)「トゥングース語」、河内良弘(1996)『文語文典』を並べ、子音の表記を見比べると表1となります。なお、河内良弘(1996)の「基本音」は現代方言の口語によるもののようで、「文語音」は過去の満洲語音を示すもののようです。最後に我々の暫定案を付しました。

<sup>1</sup> 服部四郎(1937)「満洲語音韻史の爲めの一資料」『音聲の研究』第6輯、279-294頁。『服部四郎論文集第一巻 アルタイ諸言語の研究 I』三省堂、1986年、68-86頁、所収。

<sup>2</sup> 池上二郎(1955)「トゥングース語」市川三喜・服部四郎(編)『世界言語概説』下巻、東京：研究社 462頁-464頁に掲載された文字表の音価。

<sup>3</sup> 河内良弘(1996)『満洲語文語文典』京都大学学術出版会。助編者は清瀬義三郎則府、愛新覺羅 烏拉熙春 両氏。

<sup>4</sup> 池上二郎(1986-1987)「満漢字清文啓蒙に於ける満洲語音韻の考察」『札幌大学女子短期大学部紀要』第8号(1986)、第9号(1987)、第10号(1987)。池上二郎(1999)『満洲語研究』61-181頁、東京：汲古書院所収による。

表1. 諸文献の満洲文字の音：子音

子音字	翻字	服部(1937)	池上(1955)	河内 (1996)		暫定案
				口語	文語	
	n	n	[n]	[n]	/n/	[n]
	-a, o, u k	q̇	[q̇]	[k̇]	/q/	[q <sup>h</sup> ]
	-a, o, u g	᠘	[᠘]	[k]	/g/	[᠘]
	-a, o, u h	h	[h]	[x]	/χ/	[χ]
	-e, i, u k	k̇	[k̇]	[k̇]	/k/	[k <sup>h</sup> ]
	-e, i, u g	᠘̇	[᠘̇]	[k]	/g/	[᠘̇]
	-e, i, u h	x	[x]	[x]	/x/	[x]
	b	ḃ	[ḃ]	[p]	/b/	[ḃ]
	p	ṗ	[ṗ]	[p]	/p/	[p <sup>h</sup> ]
	s	s, ʃ	[s]	[s]	/s/	[s, ʃ]
	š	ʃ (s̄)	[s̄]	[s̄]	/ʃ/	[s̄]
	-a, i, o t	ṫ	[ṫ]	[ṫ]	/t/	[t <sup>h</sup> ]
	-e, u, u t	ṫ	[ṫ]	[ṫ]	/t/	[t <sup>h</sup> ]
	-a, i, o d	᠔̇	[᠔̇]	[t]	/d/	[᠔̇]
	-e, u, u d	᠔̇	[᠔̇]	[t]	/d/	[᠔̇]
	l	l	[l]	[l]	/l/	[l]
	m	m	[m]	[m]	/m/	[m]
	c	tʃ (tʃ̄), ʃs̄ (tʃ)	[tʃ̄, tʃ]	[tʃ̄]	/tʃ/	[tʃ̄ <sup>h</sup> , tʃ <sup>h</sup> ]
	j	᠔̇z̄ (᠔̇z̄), ᠔̇z̄ (dʒ)	[᠔̇z̄, dʒ]	[tʃ̄]	/dʒ/	[᠔̇z̄, ᠔̇z̄]

※tʃ (tʃ̄), ʃs̄ (tʃ), ᠔̇z̄ (᠔̇z̄), ᠔̇z̄ (dʒ) の ( ) 内は、対談者が、便宜として、一般的な音声記号に置き換えたもの。

	y	j	[j]	[j]	/j/	[j]
	r	r	[r]	[r]	/r/	[r]
	-a, e f	f	[f]	[f]	/f/	[f]
	-i, o, u, u f	f	[f]	[f]	/f/	[f]
	-a, e w	v	[v]	[w]	/w/	[v]
	末位 -ng	ナシ	ナシ	[ŋ]	/ŋ/	[ŋ]

外国借音	翻字	服部(1937)	池上(1955)	河内 (1996)		暫定案
子音字				口語	文語	
	-a, o k̇	k̇	[k̇]	[k̇]	/k/	[k <sup>h</sup> ]

ㄐ	-a, o	g'	ǰ	[ǰ]	[k]	/g/	[ǰ]
ㄑ	-a, o	h'	x	[x]	[x]	/x/	[x]
ㄒ		ts'	ts'	[ts']	[ts']	/ts/	[ts <sup>h</sup> ]
ㄓ		dz	ǰz	[ǰz]	[ts]	/dz/	[ǰz]
ㄒ		ž	ʒ (z)	[z]	[z]	/ʒ/	[z]

外国借音 翻字 服部(1937) 池上(1955) 河内(1996) 暫定案

音節と母音字

ㄐ	c'y*	tʂʅ	[tʂ-]*	[tʂ' ʅ] /tʂi/	[tʂ <sup>h</sup> ʅ]
ㄑ	jy	ǰʒi(ǰz ʅ)*	[ǰz-]*	[tʂ ʅ] /dzi/	[ǰz ʅ]

※メレンドルフは、ㄐを c'y、ㄑを jy とする。本表は前者を cy の誤記と見なしたが、尚検討が必要である。

※ cy, jy の池上の音声は母音を明示しないので [tʂ-] [ǰz-] とした。

※ jy の服部の実際の表記は ǰʒi である。ǰ の下の半有声を示す「・」と ʒ の下のそり舌を示す「・」が欠けていると判断し ǰʒi とした。

中村：服部四郎(1937)「一資料」と池上二郎(1955)「トゥングース語」の破裂音と破擦音を見ると、気音の表記に“ばらつき”がありますね。

### 気音表記のばらつき

吉池：服部四郎(1937)「一資料」と池上二郎(1955)「トゥングース語」は、無声破裂音を、すべて、無声“有気音”とします。ところが無声破擦音の方は奇妙です。c は無声“無気音”、外国借音用の ts は無声“有気音”、c'y は無声“無気音”です。無声破擦音では、気音の出方に“ばらつき”があります。

中村：池上二郎(1955)「トゥングース語」は、服部四郎(1937)「一資料」に依るため、検討すべきは服部四郎(1937)です。服部四郎(1937)と同じインフォーマントによる服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」<sup>5</sup>では、どのようでしょう。

吉池：服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」は、音韻//と、音声[]の“簡略表記”を用いて記述します。しかし、一部分に音声[]の“精密表記”を用います。精密表記の部分を示すと次の通りです。

<sup>5</sup> 服部四郎・山本謙吾(1956)「満洲語口語の音韻の体系と構造」『言語研究』30号、1-29頁。『服部四郎論文集第三巻 アルタイ諸言語の研究 III』三省堂、1989年、1-55頁、所収。

「 例：/paŋpə/ [p̄əmp] 《綿入れの長い上衣》  
 /tatəmə/ [t̄ətəm] 《ひっぱる》  
 /kaləmə/ [kl̄əm] 《支える》  
 /surəkə/ [surk̄] , /suruku/ [surkw̄] 《糸まき》  
 /qaa/ [q̄aː] 《せきとめろ！》  
 /faqərə/ [faq̄ər] 《ズボン》

ただし、

/ba'itə/ [bait̄] 《仕事, 事柄, 事件》  
 /ba'itə'aqu / [bait-aq̄w] 《大丈夫, 危険なし, 用なし》  
 /fiaqu/ [fiaq̄w] 《はだか》  
 /fiaqu'omə/ [fiaq̄w-om] 《はだかになる》」 (12 頁)

破裂音を無声の“有気音”で表記するのは、上記の 9 例と、「/tobə semə/ [t̄oḅsɜm] 《丁度》」と「/tandəm/ [t̄əndəm] 《打つ》」と「/coqoo/ [t̄s̄oq̄oː] 《鶏》」の [q] の 3 例を加えた 12 例です。この 12 例は精密表記で、これ以外の破裂音は全て気音を付さない簡略表記となっています。

中村：破擦音はいかがでしょう。

吉池：破擦音は次の通りです。

「 例：/coqoo/ [t̄s̄oq̄oː] 《鶏》  
 /'acəmə/ [ʔat̄s̄əm] 《会う》  
 /bocə/ [ḅot̄s̄] 《色》  
 /joo/ [d̄zoː] 《運べ！》  
 /vajəmə/ [vadz̄əm] 《終る》  
 /'uju/ [ʔuḍ̄z̄w] 《頭；首》」 (14 頁)

最初の 3 例は満洲語文語の文字 c に相当するもので、無声の“有気音”となっています。これは精密表記です。この 3 例以外は全て簡略表記の無声“無気音”で記されます。

中村：簡略表記で気音を省略するのは、破裂音と破擦音の対立を、強音と弱音にあると見るためでしょう。気音の有無は余剰的なもので重要ではない、という立場です。服部四郎(1937)「一資料」で無気音とされた破擦音ですが、服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」の精密表記で気音が付されるのは興味深いですね。

吉池：この表記の違いが意味するところは、服部四郎(1937)「一資料」では無気音としたけ

れども、じっくり観察したならば気音を認めることができた。当時の服部氏の聴覚印象では、破裂音に比べて、破擦音[tʃ]の気音の量は少なかった、ということでしょう。

この気音の有無について、服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」は、付随的な余剰な特性とします。本当にそうであるかどうか、次節以降で検討しましょう。

### 破裂音と破擦音における二分法

中村：破裂音と破擦音における音の対立、すなわち強音と弱音、無声音と有声音、無気音と有気音などについて、先ず幾つかの満洲語口語の方言調査を採りあげ、どのように記述されているか確認しましょう。

吉池：満洲語の破裂音と破擦音が、どのような二分法（強音と弱音、無声音と有声音、無気音と有気音など）によって区別されるか、ということについて、幾つかの調査資料を見ると次のようです。下の表では、便宜として t と d で代表させました。

- |                              |                  |                   |
|------------------------------|------------------|-------------------|
| ①服部四郎・山本謙吾(1956)             | /t/(強音。[tʰ]~[t]) | — /d/(弱音。[ɖ]~[d]) |
| ②清格爾泰(1982) <sup>6</sup>     | [tʰ](無声有気音)      | — [ɖ](無声無気音)      |
| ③李樹蘭・仲謙(1986) <sup>7</sup>   | [th](無声有気音)      | — [t](無声無気音)      |
| ④趙傑(1989) <sup>8</sup>       | [tʰ](無声有気音)      | — [t](無声無気音)      |
| ⑤愛新覺羅烏拉熙春(1992) <sup>9</sup> | [tʰ](強子音。無声有気音)  | — [t](弱子音。無声無気音)  |

中村：服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」は、強音と弱音の対立とし、それ以外は無気音と有気音の対立とします。清格爾泰(1982)「口語語音」については、この記述だけではわかりません。各説を確認しましょう。

#### ①服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」

吉池：服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」は、新疆ウイグル自治区伊犁地方の錫伯族出身のインフォーマントに対する調査です。音韻表記として /p//t//k//q//c/ と /b//d//g//ɣ//j/ を挙げ、前者を強音 (tense)、後者を弱音 (lax) とします。

中村：強音 (tense) と弱音 (lax) はどのように定義されるのでしょうか。

吉池：次の解説があります。

---

<sup>6</sup> 清格爾泰(1982)「満語口語語音」『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』。(1998)『清格爾泰 民族研究文集』232-355, 北京:民族出版社所載による。

<sup>7</sup> 李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』北京:民族出版社。

<sup>8</sup> 趙傑(1989)『現代満語研究』北京:民族出版社。

<sup>9</sup> 愛新覺羅 烏拉熙春(1992)『満洲語語音研究』京都:玄文社。

「強音性とは、閉鎖が強く、呼気も強く、従って破裂の瞬間的騒音が強い特徴のことである。弱音性とは、これに反し、閉鎖が弱く、呼気も弱く、従って破裂の瞬間的騒音が弱い特徴のことである。」(4頁)。

中村：破裂の瞬間的騒音が強い強音 (tense) と瞬間的騒音が弱い弱音 (lax) とのことですが、話し手と聞き手の言語習慣として、騒音の強弱を聞き分け、話し分けることができるものかどうか、疑問に思います。ところで、服部氏が用いる強音 (tense) と弱音 (lax) ですが、いわゆる硬音 (fortis) と軟音 (lenis) と同じものを指すのでしょうか。

吉池：『明解言語学辞典』<sup>10</sup>によると、「音声器官の筋肉の緊張の度合いが強い音をテンス (緊張)、弱い音をラックス (弛緩) という。これを母音について使い、子音についてはフォルティス (fortis 硬音) ・レーニス (lenis 軟音) を用いるのが伝統的だが、どちらにもテンス・ラックスを使うこともある。音声学的な実体を厳密に特定しにくく、また、そうせずに曖昧に使われることも多く、問題のある用語ではあるが、音韻的に区別される音のカテゴリーを特定の1つの音声的特徴で区別できない場合などによく使われる。たとえば【以下省略】・・・」(162頁)とあります。これによると同じものを指すと見て大過は無いです。

中村：服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」は、どのような語例を挙げて、強音 (tense) と弱音 (lax) を説明するのでしょうか。

吉池：次の通りです。

「強音音素に該当する諸単音は無声の有気音である。自立語の語頭においては特に気音が強い。同じく末位 (ただし音韻的には/ə/が続く) で且つ母音で始まる他の単語が結合して合成語となっているときは、気音が無い。

例：/paŋpə/ [p'amp] 《綿入れの長い上衣》  
/tatəmə/ [t'atəm] 《ひっぱる》  
/kaləmə/ [k'ləm] 《支える》  
/surəkə/ [surk'] , /suruku/ [surwkŭ] 《糸まき》  
/qaa/ [q'a'] 《せきとめろ!》  
/faqərə/ [faqər] 《ズボン》

ただし、

/ba'itə/ [bait] 《仕事, 事柄, 事件》  
/ba'itə'aqu / [bait-aqw] 《大丈夫, 危険なし, 用なし》

---

<sup>10</sup> 斎藤純男・田口善久・西村義樹編(2015)『明解言語学辞典』東京：三省堂。

/fiaqu/ [fiaqw] 《はだか》

/fiaqu'omə/ [fiaqw-om] 《はだかになる》 」（4-5 頁）

中村：[bait-aqw] の [t] や [fiaqw-om] の [qw] など、合成語と成った時に、有気音が無気音になる点については議論が必要です。弱音 (lax) の例を見てからにしましょう。

吉池：弱音 (lax) は次の通りです。

「弱音音素に該当する諸単音はすべて無気音であって、発話の頭位においては前半部が無声の半有声音、有声音の間では有声音、発話の末位及び無声音の前では後半部が無声の半有声音である。

例：/baa/ [b̥aː] 《場所》

/ˈaɪnbuu/ [ʔambuː] 《大きい》

/tobə semə/ [t̥oɓsəm] 《丁度》

/daa/ [d̥aː] 《根本；尋》

/vadən/ [vadən] 《ポケット》

/tandəmə/ [t̥andəm] 《打つ》

/hadə/ [χaɖ] 《峯》

/gavaa/ [g̥avaː] 《おこげ》

/gegee/ [g̥ɛgɛː] 《美人》

/ˈajigə/ [ʔadziɡ̥] 《小さい》

/galə/ [gal] 《手，腕》

/ɟiame/ [ɟæm] 《取る》

/ɟaŋɟarədii/ [ɟaŋɟardiː] \* 《想像上の猛禽》 」（5-6 頁）

\*原文では […ɟardiː] の [ɟ] の下に丸括弧を付した「(◦)」が有る。フォントの作成が困難なため付してない。(◦)は有声もしくは半有聲ということであろう。

中村：服部四郎氏は、破裂の瞬間的騒音が強い強音 (tense) と破裂の瞬間的騒音が弱い弱音 (lax) によって音を区別すると理解するわけですね。わたしは、話し手が、強音 (tense) と弱音 (lax) を話し分け、聞き手が誤解無く効率的に聞き分ける言語習慣を持っているかどうか、腑に落ちません。有声音と無声音、もしくは有気音と無気音という対立の習慣によって、それと照らし合わせて区別するということであるならば明瞭で腑に落ちるのですが。もっともその場合、筋肉の緊張の強弱という特徴は音の区別にとって“余計なもの(余剰)”となります。

吉池：強音 (tense) と弱音 (lax) の対立とすることには賛成できないようですね。そうすると何によって対立している、何によって区別していると考えますか。

中村：いま述べたことの繰り返しですが、有気と無気、もしくは有声と無声、その何れかを見て特段の不都合はないでしょう。不都合はないのですが、有気音で終わる語に、母音で始まる単語が結合して合成語となると、有気音が無気音となる、という観察については注意が必要です。

「事件」 [bait<sup>h</sup>] の [t<sup>h</sup>] > 「大丈夫」 [bait-aqw<sup>h</sup>] の [t]  
「はだか」 [fiaqw<sup>h</sup>] の [qw<sup>h</sup>] > 「はだかになる」 [fiaqw-om] の [qw]

吉池：いわゆる強音 (tense) に、有気の [t<sup>h</sup>] [qw<sup>h</sup>] と無気の [t] [qw] の両者が出ることになります。これは、気音の有無によって対立する説にとって不都合ですね。

中村：位置によって、有気音が無気音化することを認めるならば、二分法における主要な対立は、有気と無気ではなく、有声と無声にあり、複合語に現れる有気音の無気音化は、無声音の一変異と理解することができます。

次に②の清格爾泰(1982)「口語語音」を検討しましょう。

## ②清格爾泰(1982)「口語語音」

吉池：清格爾泰(1982)「口語語音」は、1961年から中国の黒龍江省富裕県の三家子屯で行われた調査です。調査資料は1982年に公表されました。

破裂音と破擦音を、ローマ字表記で p, t, k, q, tʂ, tɕ と、b, d, g, ɣ, dz, dz とします<sup>11</sup>。「満洲語口語子音図」(「満語口語輔音圖」242頁)において、前者を有気音(「送気」)に配し、後者を無気音(「不送気」)に配し、気音の有無による対立とします。ところが、欄外の注記を見ると、「b, d, g, (ɣ)が表す実際の音価は **ḃ, ḋ, ḡ, ḣ** であり、p, t, k, q が表す実際の音価は p', t', k', q' である。dz, tʂ, dz, tɕ 等の音の音価についても推して知ることができよう。」<sup>12</sup>とします。

中村：[**ḃ, ḋ, ḡ, ḣ**] に補助記号 [◌̚] があります。この [◌̚] で、服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」は、半有声音であることを指すのですが、清格爾泰(1982)「口語語音」も同様でしょうか。音質について何か説明はありますか。

吉池：同書の237頁に「[b]は両唇の無声無気の破裂音である。本来は **ḃ** あるいは p と表記すべきであるが、表記上の便宜により、ここでは **b** で表記する」<sup>13</sup>とあります。無声無気

<sup>11</sup> このようなローマ字表記は中国の言語調査でよく用いられる。

<sup>12</sup> 「b, d, g, (ɣ) 代表的實際音値為 **ḃ, ḋ, ḡ, ḣ**; p, t, k, q 代表的實際音値為 p', t', k', q'; dz, tʂ, dz, tɕ 等音の音値類推。」242頁。

<sup>13</sup> 「[b] 双唇不送氣清塞音。本應以 **ḃ** 或 p 来表示，但是爲了記音上的方便，我們在這里以

の閉鎖音（“不送氣清塞音”）と明記しています。半有声音でも有声音でもありません。無声無気音であると明言しています。

中村：補助記号[.]の本来の用法は、もともと有声音であったものが、環境によって無声化した場合に使用するものです。清格爾泰(1982)「口語語音」は、[b̥, d̥, ɡ̥, ʧ̥]を、無声“化”した音と考えているのでしょうか。

吉池：その点について、清格爾泰(1982)は明記しないのですが、清格爾泰(1963)<sup>14</sup>に、内蒙古の標準音とされる正藍旗と巴林右旗<sup>15</sup>の破裂音と破擦音について、その音質を記述した箇所があり、参考になります。

「b̥音は両唇閉鎖音。無声子音であるが、他の外国語の無声音[p]と比べると、噪音の成分は一層小さい。この音を発する時、声帯は、閉鎖の段階では緩んで間隙があり、声は出ず、閉鎖が破れると同時に、声帯が緊張し、声を出す状態になる。この状況を詳細に反映しようと思うならば、[b̥]を用いて記しても良い。但し、通常は、簡便のため、bを用いて記す。」<sup>16</sup>とし、[d̥][d̥ʒ̥][ɡ̥]についても、同じ説明がなされます。

なお、清格爾泰(1982)は、「付加符号： ◦ 清音化 ! 」(668頁)とし、補助記号[.]を、国際音声記号の用法に従って無声化の記号として用いることも明示しています。

中村：清格爾泰(1963)は、内蒙古のモンゴル語の無声子音を、他の外国語の無声音子音とは違い「噪音の成分は一層小さい」とします。「噪音の成分は一層小さい」とは何を指すのか、無声無気音の[p][t][k]と、無声無気音の[b̥][d̥][ɡ̥]とは、どのような違いが有るのか、問題となります。

## 二種の無声無気音

吉池：北京語は、有気音と無気音で対立しているとされますが、無気音の閉鎖は弱く、そのため「我的」[uo̯ tə]（私の）の[tə]など軽声（軽く発音する）の[tə]は、有声音の[d]になります。林燾・王理嘉(1992)は、このような北京語の無声無気音の音質について

---

b来表示。」

<sup>14</sup> 清格爾泰(1963)「蒙古語語音系統」『内蒙古大学学报』。『清格爾泰文集第2卷』赤峰市：内蒙古科学技術出版社、663-728頁所収による。

<sup>15</sup> 「本文所採取的標準是正藍旗、巴林右旗範圍內的語音。正巴地区位于内蒙古自治区的中心地帶，在語言特点方面最具有共同性。從語言學的角度来看，該地區的語音，特殊性最小，而共同性最大。」(663頁)。

<sup>16</sup> 「b̥音：双唇、塞音。它是清輔音，但是比起其他外語的清音p来噪音成分更小些。發這個音時，声帯在閉塞階段松弛有縫隙，不發出声音，閉塞破裂的同時，声帯緊張，處於發出声音的狀態。想要詳細反映這一情況，可以用[b̥]来記。但在平時，爲求簡便可以用b来記。」(693頁)。

て、「普通話の破裂音は無声音であるけれども、発音時に筋肉はそれほど緊張せず、気流もそれほど強くなく、蘇州語や広州語の無声閉鎖音（破裂音）ほどの硬さや張りはない。筋肉の緊張の程度や気音の強弱から見ると、有声破裂音に近いが、声帯は震動しておらず、厳密に言えば、[b̥][d̥][g̥]などのように表記すべきである。破擦音も同様である。」<sup>17</sup>として、無声無気音に二種あることを示唆します。

中村：吉池さんは、以前に呉方言の蘇州語や上海語を調べていましたね。北京語と比べていかがでしょう。

吉池：上海語の声母には[tʰ]と[t]と[d]（[d]の音質については議論が必要）など、3分法の区別があります。他方、北京語には[tʰ]と[t]など、2分法の区別があります。そこで両者の音質を比べてみると。上海語の[tʰ]は北京語の[tʰ]とそれほど違いは無いのですが、上海語の無声無気音[t]は北京語の無声無気音[t]と音質が異なります。上海語の[t]はキツパリとした音（閉鎖が強い）で、北京語の[t]はやんわりとした音（閉鎖が弱い）です。これらの音に、強音（tense）と弱音（lax）を当てはめるならば次のようになります。

	強音（tense）	弱音（lax）
北京語：	[tʰ]	[t]
上海語：	[tʰ]と[t]	[d]

このような、北京語の[t]と呉方言の[t]の違いに就いて、趙元任(1928)は「呉語の破裂音である幫母・端母・見母【[p][t][k]：対談者注】の音は、フランス語の硬音であり、北京音に比べて、緊張しており清らか。従って国音（北京音）の註音には b, d, g の下に圈を加えて【[b̥][d̥][g̥]：対談者注】軟らかい清音であることを示し、表の正文中のほとんどの呉語は [p, t, k] を用いて表音する。」<sup>18</sup>とします。

中村：無声無気音に、強音（tense）と弱音（lax）の二種が有り、弱音（lax）の無声無気音には、圈すなわち補助記号[.]を付して、[b̥, d̥, g̥]とするということですね。

<sup>17</sup> 林燾・王理嘉（1992）『語音學教程』北京：北京大学出版社（第3次印刷1997年）。「普通話的塞音雖然都是清音，但發音時肌肉並不十分緊張，氣流也不十分強，聽起來不像漢語其他一些方言如蘇州話或廣州話的清塞音那樣硬而脆，從肌肉的緊張程度和氣流的強弱看，更接近於濁塞音，只是聲帶沒有顫動，嚴格地講，應該用[b̥][d̥][g̥]等等來描寫。普通話的清塞擦音同樣也有這種傾向。」（78頁）。

<sup>18</sup> 趙元任(1928)『現代吳語的研究』北京：清華學校研究院（1968年大華印書院影印本による）。「吳語的幫端見破裂音讀法是法文派的硬音，比北京的讀法較緊而脆。所以在國音下的註音用 b, d, g 下加圈（軟派清音），而在表的正文中大都用 [p, t, k] 標音。」（27頁）。

吉池：国際音声記号（1993年改訂，1996年更新）の解説によると<sup>19</sup>、補助記号[.]は「特定の言語で通常有声音を表す記号が，ある場合に無声音で発音されることを示す」<sup>20</sup>とあります。上で見た中国の文献は、補助記号[.]を利用して、弱音（lax）の性質を保持している無声無気音を示しており、国際音声記号の用法と矛盾しません。他方、服部四郎（1937）「一資料」や服部四郎・山本謙吾（1956）「体系と構造」は、[.]を付して、半有声音とします。これをあえて表記するならば、語頭で[d̥d]（=[d̥]）、有声音間で[dd]（=[d]）、語末と無声子音の前で[d̥d̥]（=[d̥]）となります。これは、国際音声記号の用法からは離れていると言わざるを得ません。中国の研究者と、日本の服部氏の[.]の用法は異なるので、注意が必要です。

中村：清格爾泰氏の[b̥][d̥][g̥]は無声無気音の弱音（lax）で、服部四郎氏の[b̥][d̥][g̥]は半有声音の弱音（lax）とのことですね。両者は同じことを言っているようにも見えますのですが、いかがでしょう。両者の違いを簡潔にまとめてください。

吉池：清格爾泰氏と服部四郎氏は、類似の音声現象について、異なる聞き取りをし、異なる表記をしている、という可能性の有ることは否定できません。しかしそれは、第三者の我々が知り得ることではありません。確認し得る両者の論文に於ける“表現”は、次のように異なります。特段の不都合が無い限り、その“表現”によって議論を進めて良いのではないのでしょうか。

清格爾泰氏は、破裂音と破擦音に於ける二分法の対立を、有気音と無気音の対立と明言します。他方、服部四郎氏は強音（tense）と弱音（lax）の対立としますが、有声音と無声音の対立と見て不都合はありません。清格爾泰氏は、対立の一方である無気音の音質を、無声無気音の弱音（lax）とします。他方、服部四郎氏は、対立の一方と見なし得る有声音の音質を、半有声音～有声音の弱音（lax）とします。これにより、両者が表現しようとした音声は異なると見て議論を進めても、特段の不都合は無いでしょう。

中村：それでは次に、③に挙げた李樹蘭・仲謙（1986）『錫伯語簡誌』はいかがでしょう。

### ③李樹蘭・仲謙（1986）『錫伯語簡誌』

吉池：李樹蘭・仲謙（1986）『錫伯語簡誌』は伊犁地方の察布查爾の錫伯語を調査したものです。

---

<sup>19</sup> 国際音声学会編竹林滋・神山孝夫訳（2003）『国際音声記号ガイドブック—国際音声学会案内—』東京：大修館書店。

<sup>20</sup> 「無声音の補助記号が用いられるのは，特定の言語で通常有声音を表す記号が，ある場合に無声音で発音されることを示す場合である。例えば口語的な英語の *Please say...* を詳しく表記すれば [plɪz̥ se...] である。」（35頁）

中村：新疆の伊犁出身のインフォーマントによるという点では、服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」と李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』は同じです。服部四郎・山本謙吾(1956)は有声音の存在を認めますが、その点、李樹蘭・仲謙(1986)はどうかのでしょうか。

吉池：李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』は、破裂音と破擦音における対立を、p, t, k, q, ts, tʂ, tɕ と b, d, g, ɣ, dz, dz̥, dz̥̥ で表記します。8頁の子音の表によると、前者を無声有気音(清送気音)とし後者を無声音(清音)とします。音声の解説の一部に於いて、[]を付して音声の精密表記を提示します。それによると、前者は無声有気音の [ph, th, kh, qh, tsh, tʂh, tɕh] で、後者は無声無気音の [p, t, k, q, ts, tʂ, tɕ] ですから、有声音は認めず、気音の有無の対立となっています。

もっとも、精密表記は一貫しておらず、dz̥ は [tʂ̥] と [dz̥]、ɣ は [q] と [ɣ]、b は [p] と [b]、t は [th] と [t] の両者が出るなど、音声の精密表記に誤植が目立つので、注意が必要です。

中村：精密表記での混乱は誤植であるとして、無声無気音の b, d, g, ɣ, dz, dz̥, dz̥̥ [p, t, k, q, ts, tʂ, tɕ] について、声の有無に関わる記述は無いのでしょうか。

吉池：特段の記述は有りません。李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』が無声無気音とする音を、同じく錫伯語を調査した服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」は半有声～有声とするわけですから、両者の異なりは、不可解といえれば不可解です。もっとも、李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』の中に、無声無気音の [t] が、有声音の [m, l, n, r, v] と同様の働きをする現象が見られます。これは、[t] は無声無気音とされるけれども、実際は有声音の性質を持っていることを示すのではないかと思います。

中村：具体的にどのような事でしょう。

吉池：無声摩擦音の x [x] と χ [χ] は、母音に挟まれたり、有声子音 [m, l, n, r, v] と母音に挟まれたりすると、有声摩擦音の [ɣ] と [ɮ] になる現象があります。当該部分を引用すると次の通りです。[]によって音声の精密表記が付されており、そこに有声音化した [ɣ] と [ɮ] が出てきます。

「(1)x, χ 在兩個元音之間或在帶音的輔音 m, l, n, r, v 和元音之間，讀作相應的濁擦音 [ɣ]、[ɮ]。例如：

xəxər	[xɣɣər]	腭
xəmxən	[xɣmɣɛ̃]	蜘蛛
dzulxum	[dzulɣum]	摩擦

unxun	[unǎγũ]	木杵	
xərxən	[xɤrɣɤ̃]	字	
ilivxəi	[ilivɣɤi]	使舔了	
χoχur	[χoβur]	耳塞	
χomχon	[χomβō]	鞞, 套	
golχunum	[golβunum]	惊醒	
banχun	[banǎβũ]	懶惰	
jarχun	[jarβũ]	新鮮的	
javχəi	[javβɤi]	走了	」(10頁)

中村：[dzulɣum] [golβunum] [banǎβũ] は、[tʂulɣum] [qolβunum] [panǎβũ] の誤植なのでしょう。この点を訂正した音声の精密表記を見ると、たしかに無声摩擦音の x と χ は、有声音に挟まれて有声化し、有声摩擦音の [β] [ɣ] に成っています。

吉池：このように有声音化するの、実はこれだけではありません。母音と、無声無気音であるはずの d [t] に挟まれても、有声音化し、有声摩擦音の [ɣ] と [β] となる現象があります。当該部分を引用すると次のとおりです。

「x、χ 在音組-xd 和-χd 中可讀作 [ɣ] 或 [β]。例如 səxd~səχd “老人” 可讀作 [səɣth~səβth] (書面語爲 sakda), axdəm~aχdəm “相信” 可讀作 [aɣdəm~aβdəm] (書面語爲 akdambi)。」  
(10頁)

中村：引用文中の [səɣth~səβth] の [th] を誤植と見て、[t] とし、[səɣt~səβt] としなければ文意が通りません。また、[aɣdəm~aβdəm] の [d] も誤植として [aɣtəm~aβtəm] とすべきでしょう。訂正する所は訂正して音声表記を見ると、確かに、d [t] が、有声音 [m, l, n, r, v] と同様の働きをしていることを見て取ることができます。誤植が多いため不安ではありますが、この部分は著者が意図して書いたものなので、信用して良いのでしょうか。

吉池：無声無気音とされる d [t] は、有声音と同じ働きをするわけですから、実際は有声音の [ɖ~d] であったと見ることができます。そうであるならば、無声無気音の b, d, g, ɠ, dz, dz̥, dz̥ [p, t, k, q, ts, tʂ, tɕ] の内、d [t] だけを有声音とするのではなく、他の無声音も有声音であったと見ることができます。

李樹蘭・仲謙(1986)は、なぜ半有声音~有声音を、無声無気音として表記したのか、という問題が残ります。

中村：調査者が北方漢語を第一言語としていた場合、声の有無の判断は困難となるのでしょう。北方漢語の無声無気音が、閉鎖が緩く、破裂の瞬間的騒音が弱い弱音 (lax) であり、

調査の対象となる錫伯語が、半有声音～有声音の弱音 (lax) であったならば、聴覚印象による音質の判断は困難となります。

次に、④に挙げた趙傑(1989)『満語研究』はいかがでしょう。

#### ④趙傑(1989)『満語研究』

吉池：趙傑(1989)『満語研究』は、黒龍江省泰来県大興(嫩江沿岸)で行なわれた調査です。<sup>21</sup>。破裂音と破擦音を無声有気音の p', t', k'(母音 a の前で q'), tʂ', tɕ', ts' と、無声無気音の p, t, k(母音 a の前で q), tʂ, tɕ, ts の対立とします。

中村：声の有無や強弱についての言及は無いのでしょうか。

吉池：明らかな言及は有りませんが、挙例をみると、k の異音として、母音に挟まれた場合、有声摩擦音の ɣ (a 以外の母音の前) と ʁ (a の前) が出現します。挙例は、kəɣə (姉)、xəɣə (女性)、ɑkɑɣə (雨が降った)、pivan (野原)。このような現象は、無声無気音の k が、閉鎖が緩い弱音 (lax) であったため、母音に挟まれて有声摩擦音に変化したと理解することができます。

中村：最後になりますが、⑤の愛新覚羅烏拉熙春(1992)『語音研究』はどのようでしょう。

#### ⑤愛新覚羅烏拉熙春(1992)『語音研究』

吉池：愛新覚羅烏拉熙春(1992)『語音研究』は、黒龍江省の黒龍江沿岸の方言と嫩江沿岸の方言を合わせて 5 地点調査したものです<sup>22</sup>。黒龍江方言の代表は孫呉県の四季屯(黒龍江沿岸)であり、嫩江方言の代表は富裕県の三家子屯(嫩江沿岸)であるとします<sup>23</sup>。明示はされませんが、当該書の調査資料は、この二地点を反映していると思なしてさしつかえないでしょう。下に引用するように、破裂音と破擦音について、p', t', k', tʂ', tʃ' と p, t, k, tʂ, tʃ を対立する子音として挙げ、前者を“強子音”後者を“弱子音”とよび、強子音を有気音、弱子音を無気音とします。

「現代満洲語の子音の系列において、子音は有気の子音と無気の子音の二対の対立とする音韻に分けられる。有気であるか無気であるかは音韻を区別する主要な標識となるが、無声であるか有声であるかには、それほど普遍性はない。とりわけ多くの場合、有声子音はしばしば無声化する。

---

<sup>21</sup> 趙傑(1989)『満語研究』の 4 頁参照。

<sup>22</sup> 黒龍江方言(黒龍江沿岸の方言)の調査地点として孫呉県四季屯、愛琿県大五家子郷、遜克県松樹溝郷興隆村の三地点を挙げる。嫩江方言(嫩江沿岸の方言)の調査地点として富裕県三家子屯、泰来県依布齊村の二地点を挙げる。

<sup>23</sup> 愛新覚羅烏拉熙春(1992)『語音研究』の 3-8 頁による。

有気の子音はいずれも強子音であり、これらの音を発する時、口腔に発出する気流は全般的な妨げを受け、気流が、発音器官を突破する時、強い噪音が生じる。発音方法の異なりにより有気の子音を、(1) 有気の破裂音、(2) 有気の破擦音、(3) 有気の摩擦音<sup>24</sup>の三種に分ける。有気の破裂音と有気の破擦音は、いずれも、無気の無声破裂音や無声破擦音と対立する音韻を構成し、有気の摩擦音は有声の摩擦音と対立する音韻を構成する。無気の子音は、破裂音、破擦音、有声摩擦音のほかに、有声の側面音、鼻音、ふるえ音、半子音をふくむ。……省略……。全ての無気の子音は弱子音である」<sup>25</sup>。

中村：「無声であるか有声であるかには、それほど普遍性はない。とりわけ多くの場合、有声子音はしばしば無声化する。」とする記述は難解です。無気の破裂音と破擦音に有声性があるとも読めそうです。

吉池：この記述の中の「とりわけ多くの場合、有声子音はしばしば無声化する。」の部分は、破裂音と破擦音について述べたのではなく、有声摩擦音の *v z ʒ ʝ* が無声化することに就いて述べていると私は理解します。当該書の47頁以降の無気音の説明に於いて、「*p* 双唇清塞音」「*t* 舌尖中清塞音」「*k* 舌面後清塞音」「*tʂ* 舌尖後清塞擦音」「*tʃ* 舌葉清塞擦音」とするので、*p, t, k, tʂ, tʃ*は無声無気音です。

中村：無声無気音の弱音 (*lax*) であるということですね。弱音 (*lax*) であることに就いて、それを想定させる具体例の記述はないのでしょうか。

吉池：*p* が有声音に挟まれた場合、有声摩擦音の *β* となります。举例は、*umβume* (埋める)、*izaβume* (集める) などです<sup>26</sup>。この举例は、*p* を弱音 (*lax*) とする記述と矛盾しません。

中村：最後に、これまで見てきた五つの調査資料について、まとめておきましょう。

---

<sup>24</sup> 気音の強い [*s<sup>h</sup>*] と気音の弱い [*s*] のように気音の強い摩擦音があることを報告する。気音の強い [*s<sup>h</sup>*] については、清格爾泰(1982)「口語語音」でも言及されている。

<sup>25</sup> 在現代滿洲語的輔音系統中，輔音應該分為送氣輔音和不送氣輔音兩套對立的音位。因送氣或不送氣，往往是區別一個音位的首要標誌；而清或濁，却没有那麼普遍性的界線，特別是許多場合濁輔音還常常清化。

送氣輔音都是強輔音，在發這些音的時候，口腔中呼出的氣流受到全面的阻礙，當氣流冲破形成阻礙的發音器官時，就產生強烈的噪音。根據發音方法的不同，送氣輔音又分為三類：(1) 送氣塞音、(2) 送氣塞擦音、(3) 送氣擦音。送氣塞音和送氣塞擦音都是和不送氣的清塞音、清塞擦音構成對立音位，而送氣擦音則是和濁擦音構成對立音位。不送氣輔音除包括塞音、塞擦音和濁擦音以外，還包括濁的邊音、鼻音、顫音和半輔音(即無擦通音)。……省略……。所有的不送氣輔音都是弱輔音。」(41頁)。

<sup>26</sup> 愛新覺羅烏拉熙春(1992)『語音研究』の48頁による。

## 現代諸方言のまとめ

吉池：①服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」と、③李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』は、共に新疆ウイグル自治区伊犁地方の錫伯族の言語を調査したものです。破裂音と破擦音に於ける対立について、我々は、声の有無すなわち有声音と無声音とし、気音の有無、及び強音 (tense) と弱音 (lax) の違いは、余剰なものとなりました。

他方、②清格爾泰(1982)「口語語音」、④趙傑(1989)『滿語研究』、⑤愛新覺羅烏拉熙春(1992)『語音研究』は、黒龍江省の調査資料で、破裂音と破擦音に於ける対立について、気音の有無すなわち有気音と無気音とします。我々も、有気音と無気音の対立として、声の有無、及び強音 (tense) と弱音 (lax) の違いは余剰なものとなりました。

中村：これを俯瞰するならば、破裂音と破擦音における二分法の対立は、西の満洲語(新疆伊犁地方の錫伯語)は有声音と無声音により、東の満洲語(黒龍江省)は有気音と無気音によるとも言えます。

吉池：声の有無の違いを、東西の地域の違いに投影するという見方は興味深いですね。東の地域を、モンゴル語とともに俯瞰することもできそうです。

先に紹介した清格爾泰(1963)は、チャハル方言に有声音を認めず、気音の有無による対立とします。Svantesson, Jan-Olof et al. (2005)<sup>27</sup>のハルハ方言の調査報告は、[p<sup>h</sup>]と[p]<sup>28</sup>、[t<sup>h</sup>]と[t]、[c<sup>h</sup>]と[c] (= [ts<sup>h</sup>]と[ts])、[ç<sup>h</sup>]と[ç] (= [tʃ<sup>h</sup>]と[tʃ])、[g]、[g]とします。[g]と[g]以外は、気音の有無による対立です。

中村：喉音の[g]と[g]のみ有声音とするのはバランスが悪いですね。

吉池：たしかにバランスが悪く、話し手と聞き手にとって、記憶の負担量が大きいけれども、一時的にしろ、このような言語が存在するとしたら興味深いことです。なお同じ調査者による Svantesson, Jan-Olof(2003)<sup>29</sup>のハルハ方言の記述によると、無声音の[k k<sup>j</sup> q]は語末と

---

<sup>27</sup> Svantesson, Jan-Olof et al. (2005) *The Phonology of Mongolian*, Oxford.

<sup>28</sup> “In previous phonemic transcriptions, the two series are almost universally rendered with symbols for voiceless and voiced consonants, and some investigators describe them as phonetically voiceless~voiced; see the survey of the literature in the Appendix on p.220. The Cyrillic Mongolian script treats them in this way, using letters which denote voiceless and voiced consonants in Russian for the two series. Since our investigation shows that aspiration is the distinctive property, we will write the Halh stops and affricates as voiceless aspirated ([p<sup>h</sup>], [t<sup>h</sup>], etc.) and voiceless unaspirated ([p], [t], etc.) .” p. 13.

<sup>29</sup> Svantesson, Jan-Olof(2003) Khalkha, in Juha Janhunen ed., *The Mongolic Languages*, Routledge, pp. 154-176.

無声子音の前で出現し、それ以外位置では有声音の[g g<sup>j</sup> ɣ]であるとしす<sup>30</sup>。この現象も含めて有声音の弱化と見て良いのでしょうか。

なお、Svantesson, Jan-Olof et al. (2005)は、チャハル方言 (Chahar) と、その東に位置するバーリン方言 (Baarin) に、有声音の表記は用いず、気音の有無による対立としす。もっとも、バーリン方言 (Baarin) の記述については、簡略なものであり、その是非が気になります。その点について、清格爾泰・確精扎布(1959)<sup>31</sup>が参考になるかもしれません。同論文は、カイモグラフ (浪紋計) を用いて声帯の振動を調査したもので、錫林郭勒盟 (チャハル方言)、及びその東に位置する昭烏達盟 (現在の赤峰市。バーリン方言) と喀喇沁 (ハラチン方言)、バーリン方言とハラチン方言の北東に位置する科爾沁 (ホルチン方言) の被験者の音について、無声無気音の[p, t, tɕ, k, ts, tʂ]と無声有気音の[p<sup>h</sup>, t<sup>h</sup>, tɕ<sup>h</sup>, k<sup>h</sup>, ts<sup>h</sup>, tʂ<sup>h</sup>]の対立としす。これらのモンゴル語方言は内蒙古語 (Mongolian dialects)<sup>32</sup>ともされす。

中村：内蒙古語 (Mongolian dialects) のモンゴル語方言では有声音が弱まる傾向があり、気音の有無によって対立すると見ることができそうですね。

吉池：内蒙古語 (Mongolian dialects) と満洲語方言が行われる東の地域には、言うまでもなく、漢語があります。この北方の漢語には、有声音が無く、気音の有無による二分法の対立となっていますが、隋唐代の中古音では、[t<sup>h</sup>][t][d] (又は d<sup>h</sup>) などの三分法の対立であったとされす。後代に、有声音が無声化し、他の無声音と合流しました。無声無気音と合流したものは、弱音 (lax) の無声無気音となったのでしょうか。無声化というのは東の言語の地域特徴と見て良いかもしれません。

中村：ところで、無声無気音に見られる強音 (tense) と弱音 (lax) について、先に我々は余剰な特徴としました。これは、南北の地域特徴として存在している可能性があります。

吉池：黒竜江省の満洲語の無声無気音と、内蒙古語 (Mongolian dialects) の無声無気音を、

---

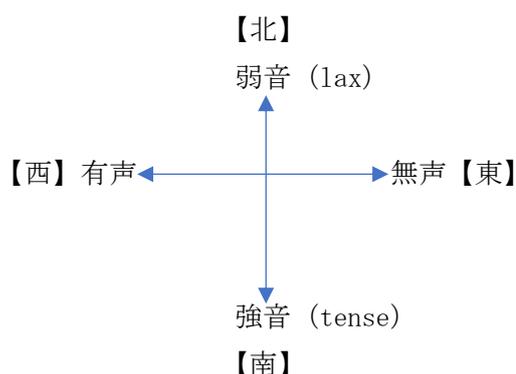
<sup>30</sup> “The weak stops and affricates are basically plain voiceless unaspirated sounds in all position. In Modern Khalkha, however, this is fully true only of the weak labials and dentals [p p<sup>j</sup> t t<sup>j</sup> ts tʂ], while the weak velars seem to be functionally voiced, though they can be phonetically voiceless [k k<sup>j</sup> q] word-finally and before a voiceless consonant. In other positions, they are phonetically voiced [g g<sup>j</sup> ɣ].” p. 157.

<sup>31</sup> 清格爾泰・確精扎布(1959)「關於蒙語輔音」『内蒙古大学学报』。『清格爾泰文集第2卷』赤峰市：内蒙古科学技術出版社、557-594 頁所収による。

<sup>32</sup> 内蒙古語 (Mongolian dialects) の分布については栗林均(1989)「内蒙古語」『言語学大辞典』2、三省堂、1427-1438 頁を参照した。

弱音 (lax) と見て良いのでしょうか。漢語については、北京方言だけでなく、無気音と有気音の二分法の対立を持つ北方方言全般の無声無気音を、弱音 (lax) と見て良いかもしれません。少なくとも、そのような漢語が“共通語”として広く使用されています。呉語や広東語の無声無気音が、強音 (tense) であることは先に話題に上りました。他の南に位置する言語の音質がどのようなものであるか、興味深いところですが、今後の課題です。

中村：有声と無声、および弱音と強音について、その分布を、東アジアに投影し、模式図で示すと次のようになるのでしょうか。



吉池：最後に大きな風呂敷を広げることになりました。最近の調査資料に目を通して無いので、風呂敷の内容についてやや不安はありますが、最近のものと言っても、今回検討した調査資料と比べて、それほど大きな違いは無いと予想しています。

中村：なお、どのような調査資料を利用する場合であっても、調査者の聞き取りの傾向の違いが調査資料に反映するので注意が必要です。

吉池：聴覚印象において、声の有無で対立する日本語を第一言語とする研究者は、気音の有無に鈍感となります。他方、気音の有無で対立する北方の漢語を第一言語とする研究者は、声の有無に鈍感となります。こうした傾向が、調査資料に反映するので注意が必要です。また、中国の研究書にあつては、いずれを見ても、錫伯語に有声音は認めず無声音（清音）とします。調査資料の表記の仕方が、伝統として引き継がれているのではないかとさえ思えます。同じことは、日本の調査資料にも言い得るのでしょうか。

中村：それでは、今回はここまでとして、次回は『滿漢字清文啓蒙』（1730年題）など過去の資料が、破裂音と破擦音における二分法の対立においてどのような特徴を示すか検討しましょう。